

日本労働年鑑 第28集 1956年版  
The Labour Year Book of Japan 1956

第一部 労働者状態

第五編 農家の状態と農民の生活

第二章 農民の栄養状態

第二節 穀類と砂糖の消費状況

穀類の消費量

耕地の広狭別に、北陸と近畿における農民の穀類消費量をみよう(第227表)。北陸地方では、米の消費量は下層より上層に移るにしたがい多くなり、五反未満一人一日当り三・三二合と最上層の二町以上四・一三合との開きは、じつに〇・八一合におよんでいる。麦類は全般的に少く二町以上農家をのぞけば、下層の方がむしろ多く消費する傾向がある。下層ほど白米消費を減らして麦で補っているものであろう。小麦粉と麺類には階層別にさしたる開きはない。

近畿においては、米の消費量は五反未満がもっとも少く二・八六合で、一町五反一二町層が三・七三合でもっとも多い。この両階層の消費量の差は〇・八七合である。麦類では各層とも一合にみたく五反一一町層がもっとも多量である。

北陸と近畿を比較すると、北陸の農民は近畿にくらべ米の消費量が多いが逆に麦・小麦粉および麺類は近畿の方が多い。両農区とも穀類消費量は上層に行くほど多く、とくに供出力と保有余力のある一町五反から二町以上の農家の消費量にもっとも多い。貧農と富裕上層農との消費水準の対照が明瞭に看取される。

農区別に穀物消費をみると、米は東北がもっとも多く平均一人当り三・七六合、北陸三・六六合、近畿三・三三合、山陰三・三〇合、瀬戸内二・九七合、北九州二・八六合、東海二・八五合、南海二・八一合、北関東二・七八合の順で、北海道二・七二合、南関東二・六五合がもっとも少量である。麦類は北九州が〇・九四合でもっとも多く、瀬戸内、南関東、東海、北海道の順となっている。

砂糖消費量

最後に、生活水準を端的に示す指標として農民の砂糖消費量をみよう。農区別にみると南関東がもっとも多く一人一ヵ年当り一五一二匁を消費し、北九州一〇七七匁、南海一〇七一匁の順となり、北陸はわずか六〇一匁で最少、東北も六九八匁で消費量は少い。階層別にみると、一般に二町以上層がもっとも多く消費しており、つぎに五反未満層は比較的少量にとっているが、これは五反未満は兼業農家が多く、賃労働兼業者がいるため都市生活の影響をうけているせいではないかと推定される。

---

■←前のページ 日本労働年鑑 1956年版(第28集)【目次】次のページ→■  
日本労働年鑑【総合案内】

---

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)

---